山梨新報「直言」原稿

二〇〇七年八月二四日

獣の命に応える「ジビエ流通」

山梨大学名誉教授・前山梨大学副学長　伊藤　洋

「猪もともに吹かるる野分かな」

元禄３年秋、琵琶湖を眼下に見下ろす滋賀県大津市石山寺の裏山・国分山麓の荒れ果てた一軒家「幻住庵」に居を構えた折の芭蕉の佳句である。

この句の作句動機はよく知られている。この場所で書かれた「幻住庵の記」の一節に、「（前略）・・里の男ども入り来たりて、『猪の稲食ひ荒し、兎の豆畑に通ふ』など、わが聞き知らぬ農談」云々という文章があるからである。

有名な芭蕉を見ようと珍しいもの好きの近在の農民が庵に立ち寄っては、イノシシの稲作被害やら、ウサギによる豆の食害などを語っていったのだろう。そんな折やってきた台風に、巣穴の中でじっと耐えているイノシシを想像して詠んだのが冒頭の句である。

芭蕉の詩心はサルやシカにも向かう。俳諧の古今集といわれた「猿蓑」のへき頭を飾った芭蕉畢生の名句「初時雨猿も小蓑を欲しげなり」は、芭蕉の命日を「時雨忌」と命名するもとになったほどだが、句の主人公はサルだ。

「ぴいと啼く尻声かな　夜の鹿」は、死の一ヶ月前、元禄７年、重陽の節句の夜陰に聞いた奈良公園のシカの声だった。これも、芭蕉の「軽み」を体現した名句として後世激賞されている。

かくのごとく秋といえば、シカ・イノシシ・サルと、詩情溢れる獣達が詩歌に美しく登場する季節だが、現実はこう文学的には行かない。というのは、「猪の稲食ひ荒し、兎の豆畑に通ふ」農作物被害の深刻さの故である。実に味気ない話だが我慢して、山梨県農政部の資料をひもといてみよう。

２００６年度における獣害の被害面積は農地３２８ヘクタールに及ぶ。その内訳は、イノシシ１１８４ヘクタール、サル２１０６ヘクタール、シカ２５ヘクタール。ちなみにその農産物被害総量は１、５３８トン。また、被害金額は２億３千７百万円に及ぶという。山林の被害もまた十分に深刻

だが、ここでは詳細は割愛するが、1万頭近くいるとされるニホンジカにわれわれ山林被害は甚大で、高山植物の宝庫であるお花畑に進出し、これを絶滅させる勢いである。レッドデータブックに掲載されているキバナノアツモリソウは南アルプスではほぼ消滅したという報告もある。

丹精込めてつくった農作物が収穫直前に獣達に食べられてしまう虚しさは想像に絶するものがある。その結果、就農意欲が減殺され、離農が進む、地域全体が限界集落化するというお決まりのパターンが本県中山間地域で、また全国各地で頻々と起こっているのである。

日本の山野の獣世界がこんなに無政府状態になってしまったのは、正確には分かっていない。ただ、原因の一つとして、獣達が人間を最大の敵とみなし、捕獲することを目的とした人間の食べ物を奪うことが、彼らの生命を脅かすまでに高じてきたのである。オオカミが絶滅したあとは、奥山の荒廃に伴い、獣たちは里に下りてきて、豊かな食べ物を求めて人間の住む場所に出没するようになった。

本県で昨年一年間に「と殺」した特定鳥獣は、イノシシが3,903頭、ニホンジカ2,552頭、サル672頭の多数に上る。彼らの末路はあわれで、そのほとんどがゴミ処理場で焼却されるか、一緒に埋設されるかしている。

古来、狩猟といえば自然界に生息する獣を捕獲して食べる、肉食文化であった。食肉用の獣は、皮を剥いで、食具や生活用具に利用するなどの多様な使い方をしてきた。

ヨーロッパでは、食肉を目的とした牛や豚の飼育・繁殖法が規格化され、現代人の食生活は、動物の命を奪い、肉を食べることを通じて、生命の尊厳を学ぶ機会を失ってしまったのである。

ジビエ（野生鳥獣の食肉）を通じて、人間と自然界との関係を再考する機会を与えてくれる。

ジビエ料理は、単に食材としての価値だけでなく、地域の農業と環境を守る役割を担っている。

ジビエ料理の普及は、地域の農業と環境を守る役割を担っている。